

満洲から北平へ ——鍾理和の中国大陆における事跡について

今 泉 秀 人

序

本稿はひとりの台湾人作家の事跡——「事実の痕跡」にまつわるものであり、伝記的記述をめぐる調査の中間報告である。

この作家、鍾理和（1915-1960）については、近年野間信幸氏が翻訳集¹⁾を出版し主要な八篇の中短編小説が訳出され、作者と各作品に関する紹介がなされた。これを読むと鍾理和という作家が、残された作品の大半において自伝的要素を色濃く感じさせるタイプの書き手であったことがわかる。

鍾理和は日本統治時代に日本語による学校教育を受け、1937年頃、皇民化運動の中で習作を始めている。にもかかわらず創作言語を現代中国白話文とする「中国語作家」であったことは特記すべきことであろう。そして創作の開始とほぼ軌を一にして彼は故郷の台湾を離れ満洲へ向かう。奉天（瀋陽）に四年ほど住んだ後、日本占領下の北平（北京）に移り、日中戦の終結と共に台湾に戻っている。四十五年の短い生涯のなかで、24歳から32歳という人生の華とも言える時期に大陸での生活を経験しており、これから述べてゆくように、この八年間が彼の作家としての骨格を作ったのである。

戦後、半世紀続いた日本の植民地支配からようやく解放された途端に、今度は国民政府の接収、そして国民党の軍事政権による白色テロの圧政へと大きく揺れ動いた台湾の社会にあって、鍾理和は戦前戦後に活動時期を跨がらせた数少ない作家であった。台湾文学史においては、「五〇年代初期に唯一中国語で創作に従事することができた」²⁾ 稀有な台湾籍作家として名を刻まれている。生前には文壇からほとんど注目されることのなかった鍾理和は1960年に亡くなった後、1970年代の台湾社会で台湾本土化の動きが生まれると同時に興った郷土文学の萌芽の中で、「戦前から続く台湾文学の地下水脈の再認識」³⁾によって、すでに失われた先行者として脚光を浴び、「台湾文学」の先駆者として“発見”されることになる。

鍾理和文学の今日的な意味をここで端的に示せば、それはいわゆる中国語圏文学史における、大陸と台湾という二つの最重要地域を縫い合わせるような移動と創作を行った作家とその創作、ということになるだろう。そのことを考えていくためには、まず、鍾理和が1938年から1946年、すなわち日中全面戦争の開始から中国の戦勝（台湾の光復）までという特殊な時期に生活していた中国大陆での経験や意識を、彼の社会的身分と、さらにはそれを成り立たせていた大陸における台湾人の有り様をもとに検証してみる必要があると思われる。

手始めに、中国語作家としての鍾理和の言語的な背景を知るために、彼が死の前年1959年に自己の創作言語について述べた文章を読みたい。

私が学校で学んだのは日本語で、卒業してから暫くの間接していたのもほぼ全て日本語でした。これがまず第一に挙げるべきことです。その次に、私の中国語（当然それは白話文のことです

が) もまた誰に習ったものでもなく自然におぼえたもので、客家語の音節でもって読んでおりました。つまり以上の二つのことは、私が後になって創作をする時にいわれなき苦悩を感じた理由であり、また私にようやく書けたものが、ぎこちなく乱れていた理由でもあったのです。私ははじめてものを書くことを学んだ時、手で文章を書きながら、胸の中では日本語でその元になる文章を作っており、それを中国語に翻訳してそれからようやく原稿用紙に書いていました。日本語の文法と客家語音の中国語と、これが私の二つの大敵でした。現在では前者の影響はだんだんと薄れてきているものの、後者——つまり客家語の音節で読んだり書いたりしてしまうことですが、それはまだ直っておりません。自分はもう現代中国語を身に付けられたというのに、です。もしも私が現代中国語の標準音〔北京音:引用者注〕で読んだり書けたりしたら、書いたものがちゃんとした「ことば」になっているかどうか、また白話文としてそれがよく通っているかどうかについて、耳で聞くだけですぐにわかってその場で確かめてなおすことができるのですが。

私は、このことは、私の暮らしてきたような環境のもとで創作を学んでいるものにとってはどうしても避けられない困難であると思います。この点に関しては、光復後に創作を学び始めた人は幸運なのです。しかし、そうは言っても、私は相変わらず自分がだらしがないということ認めています。なぜなら、もしも自分がしゃかりきになって書いてゆけば、必ずやこのような束縛から逃れられるはずだからです。⁴⁾

日本統治下の台湾に生まれ育った多くの台湾籍の作家と同様、鍾理和にとって、母語(客家方言)とも発音・語彙などにおいてかなりの隔たりがあり、学校(公学校)における教授言語(第一言語)の日本語とは甚だしく異なる「中国白話文」を自身の創作言語とすることには大きな困難が伴った。

「中国白話文」とは、近代ナショナリズムの台頭と共に、清末から五四運動を経て中国大陸において急速に普及した中華民国の新しい国語を記述する口語文体である。1920年代には「この新しい口語文を台湾でも普及させ、民衆運動に役立てよう、これにより新しい文学を作ろうという運動が植民地近代教育を受けた新世代の台湾人知識人により提唱され」⁵⁾ ている。「これは、同時期に展開していた中国の近代国家建設の文化的成果である中国白話文の普及により、日本の「同化政策」に抵抗し、また同時代の中国の文化潮流にも合流していこうとする動き」⁶⁾ でもあった。後述するように、鍾理和もこのような動きに波長を合わせたように「中国白話文」を通じて大陸の五四新文学を積極的に吸収し自らも習作に手を染めていく。しかし如上の言語的背景からして、本格的に創作をするために必要な「中国白話文」を台湾で習得することはできなかったのである。

一 大陸に渡る前の状況

本稿が記述の射程とする鍾理和の前半生のうち、特に大陸へ渡るまでの状況を、これまでに蓄積された資料や年譜などの先行研究⁷⁾をもとにして紹介したい。

鍾理和は1915年に台湾屏東県の高樹郷広興村で生まれた。この場所は当時大路関と呼ばれており「六堆」に属する。「六堆」とは、明末から清初にかけて広東から台湾に渡った客家が、長く続いた閩南系の住民との対立から少数者である自らを守るために作った自衛の組織であって、台湾の中で

ひとまとまりの居住・活動区域を形成してきたものを言う。鍾理和の生まれた大路関もその六堆の中にあった。父親は六堆でも名のしれた大地主であり、客家としてのプライドが非常に高く、日本統治下にあつてあだ名の「蕃薯（さつまいも＝台湾を意味する）」を戸籍名として登録したという逸話が伝えられている。父親はパイナップルやバナナの農場を営む他、複数の産業に投資や経営の手を広げており、共同出資して日本や中国大陸にも商社を設けていたという。理和は彼の妾腹の第二子であった。めかけばらと言っても大家族制のもとでのそれであり、同じ屋敷の中で正室の第一子であった同い年の和鳴と、裕福な地主商人の息子として分け隔てなく育てられた。

この異母弟の鍾和鳴（1915-1950）は、鍾理和の生涯にとってはもちろんのこと、台湾の近代史においても、くっきりとした足跡を残した人である。侯孝賢の映画『好男好女』（1995）で語られる鍾浩東がつまり鍾和鳴であり、若い頃から日本の統治に対して強い批判の姿勢を示し、同時に祖国中国への思いやまず1940年に大陸に渡って抗日戦に参加した。戦後帰台してからは基隆中学の校長となるが、二・二八事件の後、国民党政権に対する反政府活動を行ったかどで銃殺刑に処せられ非業の最期を遂げた人物である。⁸⁾

鍾理和は和鳴を自らの一番の理解者であるとし、彼の存在が、自分が結果的に文学にその身を捧げたことのきっかけであったと書いている。理和は、和鳴を「兄弟」（弟）、と言っているが、これがおそらくはある時期から「二哥」（兄）という呼び方になる。二人の関係は、少なくとも理和の側から言えば、陰と陽の組み合わせさったもの、一枚のコインの裏表のように思われる。肝胆相照らす同い年の兄弟であったことはまず間違いないが、両者の関係は単純なものではなかった。理和にとっての和鳴とは、自分の生き方を決定づける鏡となる対象であった。そこには当然のことながら両者を隔てる何か映し出されたはずであり、それは理和を時に苦しめながらも、彼の創作の駆動力になっていたであろう。

鍾理和の大陸行にも和鳴の存在が作用を及ぼしていたようである。理和が満洲に渡った直接的原因は、全く個人的な、恋愛と結婚の阻害⁹⁾によるものであった。しかしその行動の内側には、台湾から自身を押しだした要因として、日中の開戦によって日増しに固められていく日本の支配体制（「防衛団」への参加強制）に対する強い反発の意識が存在したのであるし、大陸へ引きつけられた要件としては、客家としての「原郷人」意識¹⁰⁾、また大陸で興った「中国白話文」による五四新文学の主張する封建打倒や個性の尊重や人道主義的精神に対する強い賛同の気持ちがあった。この日本への反発にしる、大陸への憧れにしる、やはり根底には和鳴の存在が大きい。何より理和に作家としての自覚を促したのは和鳴であった。鍾理和は1957年に以下のように記している。

公学校高等科を終えた後、村の塾に入って一年半の間古文、つまり中国語〔古典文：引用者注〕を学んだ。このことはこれ以後の私の仕事に多大な影響を及ぼした。私の後の文学の仕事は、主としてやはり学校で習う以外の雑多な本を読むことによって始まったと言えるだろう。公学校高等科の時、父親から教えられて得た少しばかりの読む力を用いて、中国語の古文体の小説をぼつりぼつりと読んだ。〔略〕後にはさらに高雄や嘉義などから新体〔白話文：引用者注〕の小説を買って求めた。当時対岸の大陸はまさに五四新文化運動のあと新文学が次々と勢いよく出現していた頃で、（北新書局出版の）魯迅や巴金や茅盾、郁達夫などといった人々の選集は台湾でも買うことができた。これらの作品によって私はほとんど寝食を忘れた。それらにあまりにも熱中してしまったおかげで、自分でもひょいとペンを持って書きなぐるようになった。しか

し、その頃はまだ作家になろうなどとは思ってもおらず、ただそういうことを手慰みにしていたに過ぎない。(何も考えずにただ模倣をして満足していた。)

ある時、私は作品——それはエッセイのようなものだったと思うが——を、当時高雄中学に進んでいた件の弟〔和鳴：引用者注〕に見せた。彼は黙って読み終え、だしぬけにこう言った。君はたぶん小説を書いたら良いだろう、と。このことばがふと口に出たものなのか、あるいはなにか特別な思いがあったのかはわからない。あとになって彼は他所から——高等学校の時は台北から、大学に入ってから日本から——はるばる日本語に訳された世界文学や文芸理論に関する本を私に送ってくれた。彼の一言によって心を決めたというわけではないが、ただ彼がこのようにしてくれたおかげで私は文芸との離れることのない関係を継続させた。いま私が文学の仕事についているのは、彼の励ましが大いに関わっているのである。¹¹⁾

ここで、本稿に直接関係する重要な先行研究として、澤井律之氏の鍾理和研究¹²⁾について触れておきたい。澤井律之「北京時代の鍾理和」¹³⁾は、鍾理和の大陸体験前後の意識の展開を、「台湾で中国人としての民族意識に目覚め、大陸に渡ったものの「中国」に失望し、結局台湾人としての民族意識にたどりついてゆく過程」¹⁴⁾であった、ととらえている。澤井論文はさらに、その「民族意識は植民地支配に対する抵抗の意識であり、近代中国ナショナリズムとイコールではない。たとえ近代中国ナショナリズムに指向していたとしても、それらは、中国との直接の接触をもたないところで観念的に思弁されたものであり、あるいは理和によって多かれ少なかれ理想化されているゆえ、中国の現実とふれたときには、当然ながらそのずれを前に、困惑し、挫折し、はなはだしくは後退をせまられてしまわざるをえない。しかし、台湾は日本の植民地支配によって中国から切り離されていた以上、台湾人はおおむね理和のような形で中国近代ナショナリズムに目覚めるしかな」¹⁵⁾ かった、と分析する。本稿はおおむね澤井論文のこの主張を踏襲するものである。ただ、これにいくらかの説明を加えるならば、大陸に渡る前の鍾理和の民族的な意識（「中国との直接の接触をもたないところで観念的に思弁されたもの」〔澤井〕）とは、客家の「原郷人」意識を基底としながらも、そこから大陸の新文学の影響によって芽生えた独特の「中国語作家」としての意識だったということである。この意識は当然のことながら創作言語の選択と表裏一体となったものであった。

二 満洲へ渡った台湾人

「原郷人」意識を抱えながら25歳の鍾理和が新妻と共に渡った満洲国とは、当時の台湾人にとっていったいどのような場所だったのだろうか。日本統治時代に台湾から満洲へ渡った人々について、21世紀になってから台湾で非常に多くのことが明らかにされてきた。その発端となり中心となったのは、中央研究院の歴史学者、許雪姬氏による一連の研究である。それは、戦前に台湾から大陸に渡り、戦後台湾に戻ってきた台湾籍の引揚者たちや、彼らの残した家族らから聞き取りを中心とした取材を行い、それを基に彼らの個別的状況や心境を台湾人の個人史として記録するという地道な作業の積み重ねによってなされた。そして、それによって、これまでにも知られていた、大陸で国民党員となり、戦後の台湾国民党絶対政権下において高級公務員や社会の上層部に組み入れられていった「半山（半唐山的本省人）」と呼ばれた人々や、あるいはその反対に鍾和鳴のように戒嚴令解除

以降ようやく日の目を見ることになった、二・二八事件後の凄まじいパージによって命を落とした共産党員やそのシンパの人々のような例以外にも、多くのごく普通の台湾人が、「進学・求職・商売のため〔略〕一部は日本統治に反対したため」¹⁶⁾、つまりは生活のために、「台湾に比べ〔略〕広々とした天地があり、求められる人材も多く、わけても資源が豊富である」¹⁷⁾ 彼の地を目指したということがわかってきた。そして、満洲に「出かけたものたちには一般的に家族もちの傾向があ」った¹⁸⁾ という。鍾理和の目に映った満洲も、きっとこのようなものだったであろう。また、理和とひとつ家に育ち公学校の同級生でもあった従兄の邱連球（1914-1953）が、大陸で事業を始めるために一緒に満洲に渡っているということも指摘しておきたい。

三 「満洲自動車学校」「奉天交通株式会社」「華北経済調査班」

日本統治下の台湾から大陸へ向かったのは往々にして「植民統治の辛酸を嘗めつくしたことから、漢民族の政府に心を寄せ〔略〕台湾総督府による圧迫を逃れようと」¹⁹⁾ した人々であった。しかし彼らは、「国民党政府が統轄する地域では就業の機会がなかった」²⁰⁾ のである。一方で、満洲国においても、また日本傀儡政権支配下の「淪陷区」においても、大陸における事実上の日本統治下の企業や政府関係の組織で働くには日本語の能力はもちろんのこと、一定の学歴や一定レベルの職能・資格を持ち合わせている必要があった。理和が、その大陸移住の前段階において、まず満洲の自動車学校で自動車運転免許を取得したことは、彼の生活者としての堅実な考え方と覚悟を示すものだったと思われる。彼が通った「満洲自動車学校」がどのような学校であったのかということはまだ調べがつかない。しかし、この学校での生活を扱った鍾理和の大陸時代の作品を読むと、そこには共に学ぶ若い朝鮮人との交流が描かれており²¹⁾、台湾と同様に日本の植民地であった朝鮮から満洲へ渡った人々が、やはり台湾人と同じような状況に置かれていたということが想像できる。

鍾理和の自動車運転免許取得という事跡をもう少し大きな視野からとらえようとすれば、日本が1920年代から国産軍事車両の確保と国内企業の保護育成に着手したことを考えねばならない。その後、満洲事変後の戦時体制の中で、1933年に内務省の自動車取締令（免許法）が全面改正される。自動車運転者は軍を中心に不足しており、そのため日本においては民間の自動車教習所がこれ以降次々と作られていった。それでも運転技能者は希少価値を持ち、特に大陸でその力を発揮したという²²⁾。そして、「支那事変勃発と共に英米依存の急速現状脱却は国産自動車工業の緊急整備の裏打ちとなり、昭和十四年には、さしも難事を極めた国産自動車工業の完全独立を見るに至った」²³⁾ というように、日本の大陸進出と歩調を合わせて自動車産業が急成長してゆくのである。満洲においては、軍が自動車政策を転換し後方輸送車として普通大衆車を選んだことによって、1939年に満洲自動車製造株式会社が設立され、すでに進められていた都市や道路の整備とともに満洲には大規模なモーターリゼーションが起こる。むろん今日のように一般家庭が自家用車を所有するなどというレベルのものではないが、人間の生活と自動車とが密接に関わり合う状況が生まれてきたのである。このような新しい社会の出現によって、免許制度が整備され、満洲に自動車運転技能者が求められた結果、自動車学校ができた。

交通の発達に与ったのは自動車だけではなかった。もとより日本の満洲における立脚点が満鉄という鉄道ネットワークであったわけで、そこに海路や空路の驚異的な発展が加わる事によって、満

洲における交通・観光事業は大きな成長を遂げる。その背景には日本の満洲政策を国の内外に認めさせようとする国家的宣伝活動があった。日本では1930年代から満洲旅行ブームが起きる。満洲におけるツーリズムのうちで最も発達した産業は観光バスであった。そして「満洲の観光バスは一九三〇年代に集中的に登場し、その出現と増殖自体が、満洲における軍事力を背景とする日本勢力の浸透に伴うもの」²⁴⁾ だった。

満洲へ渡り運転免許証を取得した鍾理和が最初に勤めたのは「奉天交通株式会社」²⁵⁾ だった。この会社は1937年に、満洲国交通部の指示に従い奉天市公署（政府）と大連都市交通株式会社が共同出資して設立したもので、奉天ではもちろんのこと、満洲を代表する規模の観光バス会社だった。大連都市交通株式会社は、1926年に満鉄が全額出資して作った南満洲電気株式会社を经营主体とした会社である。その大連都市交通株式会社と奉天市政府が作った奉天交通株式会社は、まさに日本の国策会社であったとすることができる。鍾理和はこの会社でバス運転手として一年ほど働くが、雪道で事故を起こしたために解雇されて職を失ってしまう。なお、この会社では、従兄の邱連球の弟、邱連奇（1919- ?）も共にバス運転手として働いていた。

鍾理和は、1941年夏に、おそらくは邱連奇の世話で北平に移住する。移動の最も大きな理由は経済的な問題であったと思われる。北平では、「華北経済調査班」で通訳員として働いていた²⁶⁾ ということが残された日記²⁷⁾ からわかっているが、就職の経緯などについてはわからない。「華北経済調査班」という組織については、「“南満洲鉄道株式会社”に属す下部組織であり待遇はすこぶる厚かった」²⁸⁾ とあるように、満鉄調査部との関わりが指摘されている。日記に書かれた時期や場所などの記録から判断して、鍾理和が通訳として働いたのは、満鉄調査部が1940年11月から44年3月まで行った「華北農村慣行調査」の仕事であったと推測されよう。

日本の満洲支配の中心的役割を果たした南満洲鉄道株式会社、満鉄は、設立当時日本最大の株式会社であった。この満鉄が主体事業である鉄道経営の他に、国策の調査立案を行うセクションを持っていたことは周知の事実である。この組織の仕事は、「最初は会社を通じた国策調査だったのが、ロシア革命、満洲事変、日中戦争と続く中で、直接に国家機関と結びついた調査活動へと変身していった」²⁹⁾。1932年の満洲国成立にともなって関東軍から満洲国の経済政策の立案を要請されるようになった満鉄が、その受け皿として最初に作ったのは経済調査会（経調）であった。経調は十河信二委員長（満鉄理事）のもと、単なる調査機関にとどまらず、政策立案機関として「関東軍の手足」となり活動することとなる。そして、満洲国の政策立案が一段落すると、経調は、日本軍による分離工作が進行していた華北地域の調査活動に次第に重心を移すようになり、1936年には「調査部」と改称された。翌年の改組にともない社内での調査業務の比重が大きくなると、1939年に東亜経済調査局・北支事務所・上海事務所調査課・中央試験所・満蒙資源館・大連図書館などが調査部に統合され、いわゆる「大調査部」が発足する。1940年4月には、満鉄調査部史上最大規模の増員がなされ、1941年度の実在員は、職員九一四名、雇員三三六名、傭員七八九名、という合計二千人規模の巨大な調査機関になっていた。この体制のもとで「支那抗戦力調査」を初めとする一連の総合調査が実施されている。³⁰⁾

鍾理和が通訳員として関わったと思しき「華北農村慣行調査」は、日本軍が治安強化運動の名のもとに「残虐な鎮圧」を行うという状況下で³¹⁾、河北省や山東省の農村地域を対象として施行したフィールドワーク調査であったとされる³²⁾。鍾理和はこの仕事に対して強い不満をおぼえ三ヶ月ほどで辞職している。

鍾理和の大陸経験を総括する上で満鉄調査部の仕事を辞めたことは重要な意味を持つ。なぜなら、このことをきっかけにして、彼が「日本人」用の配給を受けることをやめ、自ら「中国人」の中に入り、具体的には練炭の小売をして生きていこうと決意したからである。彼は、台湾人であることを隠し、広東梅県出身の客家として中国人社会に生きることを試みたという。

がんらい「台湾人にとって満洲国への流入は、台湾におけるさまざまな民族差別の存在を反射的効果として、一面で待遇における民族差別から脱却し、社会的上昇の機会を与えるものであった」³³⁾わけである。それは、「日本人の満洲国統治にとって「日本人と中国人の橋渡し（日本人和満洲人的橋樑）」の機能を果たす潤滑油的機能が必要とされ、その役割を台湾人が果たしたことと表裏一体をなすものであった」³⁴⁾。鍾理和はそのような大陸の台湾人社会を、戦後のある時期にしたためた以下の文章の中で「歴史的に誤った奇形社会」³⁵⁾と評している。

祖国中国が対日戦争に勝利して偽満洲政権は崩壊し、これより前に台湾人が立脚していた社会的背景——それは歴史的に誤った奇形社会と言って良いだろうが——が即座に壊滅せられたことで、台湾人はすぐさま容赦なく生業を失う状況に陥り、食べていくに事欠くようになった。彼らは特殊な技能を持っていたが、それはすでに無用の長物となってしまう、たとえ中国人の身分をもってしても、接収というつまりは機能を停止した政治的状況のなかでは失業者が街頭にあふれ、なお日増しに多くなるばかりで、台湾人にはそこに足を踏み入れる余地すらない。彼らに残された唯一の道は故郷に帰ることであった。失業、それは彼らに台湾に戻りたいという気持ちを起こさせる動機となった。³⁶⁾

「奇形社会」とは、日本語と中国語³⁷⁾を生活の場で使い分けることができる台湾人の「特殊な技能」に根ざしたものであり、さらには、それと同時に「台湾人は、中国人でありながら日本の植民地統治下において法的には日本人でしかありえないという二重性によって規定され」³⁸⁾ていた、ということの意味するのであろう。その結果、台湾人は「中国人と日本人の間に翻弄されざるをえないという位相に立たされていた」³⁹⁾のであった。ゆえに理和にとって、満鉄調査部の仕事をやめ、配給を絶ち「中国人」として生きるということは、自身の意識を規定する現実的存在としての立脚点に関わる選択として決定的な意味を持ったはずである。しかし、結果として彼の商売はうまく行かなかった。

四 北平における創作活動

苦境に立たされた理和が選んだのは本格的に作家への道を進むことだった。それは1943年頃のことだったと思われる。おそらく理和と同時期に北平に移っていたであろう邱連奇に経済的な支援を受けながら、理和は1943年8月に執筆した「游糸」を皮切りに、1944年3月の「新生」、同年5月の「薄芒」、7月には「夾竹桃」と、次々に小説を創作してゆく。それらは1945年4月に作品集『夾竹桃』にまとめられ、「江流」というペンネームで、北京・馬徳増書店から刊行された。この小説集に収められた作品は総じて暗く、特に表題作の「夾竹桃」は、彼のみた「中国人」の暗澹たる社会を「傍観」する絶望的な筆致⁴⁰⁾であると評される。これが彼の生前に刊行された唯一の作品集であ

る。

北平で作家となった彼の職業的な意識や活動の状況について考えてみたい。『夾竹桃』に収められた諸篇を書き始める少し前、1943年の前半ごろ、鍾理和には日本の小説や散文を中国語に翻訳して新聞や雑誌に投稿していた時期があったようである。残念ながらこの翻訳については、何を訳したのか、またどこに発表されたのか全くわかっていない。つまり、彼の文学修行期の活動の重要な部分は未だにほとんど明らかになっていないということである。そして当時の自らの創作状況について、理和は戦後、林海音（1918-2001）に宛てた手紙⁴¹の中で、創作に関しては、北平でひとり黙々と開始し、もっぱら読書と勉強に打ち込み続け、六年間の北平滞在中社交の場に出ず、台湾人の間にも知られていなかった、と書いている。あくまでも戦後の台湾で以前の生活を回顧した記述であるから、細かな点について省かれているのは当然のことであろう。しかし、疑問に思われるのは、ほとんど社交の場に出ることもなく、文学上の指導者や同好の友人もいなかったはずの無名のよそ者が、なぜ北平で小説集を出版することができたのか、ということである。ごく普通に考えれば、習作を新聞や雑誌に発表することで徐々に名を知られて先輩作家や編集者、また同じような境遇にある友人との出会いや人間関係が生まれ、文学修行を積むなかで作品の質を高めてストックを増やし、やがて出版にこぎつける、というような流れが思い浮かぶが、北平での習作期の活動について鍾理和は具体的には何も語っていない。

現在与えられている手がかりのひとつは『夾竹桃』の版元である「馬徳増書店」ということになる。この出版社についても、「まだよくわかっていない」⁴²ということがようやくわかった、という段階である。ただし、張泉氏の研究⁴³は、おそらくこれが、武徳報社と深く関わる出版社だっただろう、としている。武徳報社は、華北文化書局と同じものであり、日本統治下にあった華北の“官制”出版の中心的存在だった。武徳報社は、日本軍の華北駐屯軍報道部別動班が1938年に北平で作った出版社で、その目的は日本占領区の中国人に宣伝宣撫を行うことであった。会社を作ったのは管翼賢（1897-1951）と山加亨少佐（不詳）であったと言われている。管翼賢は1929年に北平で『実報』という新聞社を経営しており、また一方でその新聞の「実話」欄のコラムニストとしても人気があった人で、日中開戦後日本軍に協力して武徳報社社長となった。戦後に漢奸として処刑されている。馬徳増書店は、表向きは民間の出版社であるが、特に1944年に武徳報社（華北文化書局）が解散してからは、当時わずかに残っていた“官制”雑誌『中華週報』を出版配給していたことがわかっており、やはり日本軍を後ろ盾としていた存在だったであろうことが張泉氏によって指摘されている。馬徳増書店からは鍾理和の『夾竹桃』のほか、謝人堡『逐流之歌』⁴⁴などが出版されており、『逐流之歌』の奥付には「江流編校」とある。鍾理和は謝人堡（1915-?）という作家と近い関係にあったはずである⁴⁵。謝人堡はまた、「談『夾竹桃』」⁴⁶という評論を残している。

もうひとつ、鍾理和が北平時代に行っていた文学活動の内容を暗に示す事柄として、台湾人の藍明谷（1919-1951）という人物の存在⁴⁷がある。この人は、1919年に台湾の高雄岡山で生まれ、台湾の師範学校を出てから屏東の公学校で教師をしていたが1940年に辞職し、東京へ出た。折しも太平洋戦争が勃発し、彼はすぐさま大陸へ渡り、1942年に北平の東亜経済学院に入学した。そこで日本の支配下で虐げられた中国人が貧しさにあえぐ淪陷区の現実に触れ苦悶し、魯迅の作品に影響を受け、内心の鬱積を吐き出そうと、「騒生」の名で創作を開始した。この時期に彼と理和は知り合って意気投合しあったという。戦後は台湾に戻り、魯迅の短編小説「故郷」を対訳の形式で日本語訳して出版した経歴を持っている。戦後の資料⁴⁸は、この藍明谷と鍾理和の間に、北平での文学を媒介

とした親密なつながりがあったことを示唆している。

上述した二つの事柄から推測できることとして、北平時代の鍾理和は、自身が書いたようにまったく孤立していた、というわけではなかろう。少なくとも「馬徳増書店」を軸とした出版編集に関わる人間関係を有しており、そして、また、台湾出身の作家とも一定の文学上の関係を結んでいたであろう。しかし、それを敢えて言い出さなかったのは、上述した手紙の書かれた1956年の台湾においてそのどちらもが公にし難いことだったからではないだろうか。前者は日本との関わりにおいて。後者に関しては、例えば理和と北平で交友関係にあった藍明谷は戦後、台湾で理和の弟、和鳴と共に「叛乱」のかどで投獄され1951年に処刑されていることを考えれば理解できる。

五 「台湾省旅平同郷会」

最後に、台湾省旅平同郷会⁴⁹⁾について触れておきたい。

戦争で日本が負けたことによって、大陸における台湾人の立場や状況は悲惨なものとなった。以下、許雪姬氏の文章を引用して当時の状況について考えてみたい。

日本の勢力範囲下の中国にいた台湾人は〔略〕その大部分が自力で中国大陸に足場を築いていた。台湾人が中国へと向かった共通の理由は、生活のためである。しかし台湾人の身分は特殊であり、国籍の上では日本人であるが、実際には日本人ではなかった。民族の上では漢民族であったが、大多数の漢民族とは異なり、中華民国の国籍ではなかった。台湾人がいかなるアイデンティティを持ち、いかなる選択をしたのか。これは政権が何度も変わったこともあり、当時の人の本当の思いを理解しようとするのは難しい。〔略〕つねに記憶は幾重にも積み重なっている。〔略〕1945年8月15日、日本が降伏した。台湾人はいったい勝ったのか、それとも負けたのか。自分では勝ったと思おうが、負けたと思おうが、降伏したと考えようが、光復したと考えようが、いずれにせよ中国大陸にいたこれらの台湾人に与えた衝撃は大きかった。⁵⁰⁾

1945年には戦勝によって漢奸（日本軍協力者）逮捕が始まった。台湾人がこれに抗弁し、それによって漢奸に関する新しい解釈が示されたのは1946年1月のことだった。結果として台湾人が漢奸裁判によって刑をくだされることは多くなく、たとえあったにせよ量刑も重くなかったという。しかし、国民政府はこの時、同時に台湾人の財産処理に関する法律⁵¹⁾を出した。それによれば、台湾人の私産は政府に接収・保管され、もしも確かな本籍を提出し、日本軍に加担しなかったこと、中国人を虐げなかったこと、日本人の物資の避難を助けなかったことを証明しなければ、私産は返還されないこととなる。この法律が発布されると大陸にいた台湾人はみな恐れおののいた。戦後の中国大陸における台湾人の親睦と福利を目的として1945年9月に結成された台湾省旅平同郷会は各方面に働きかけ、結果としてこの法律は取り消されたのであるが、法律発布の事実が台湾人に与えたショックは相当大きかったであろう。中国陸軍総司令部の考えは、台湾人の意識はすでに国内の中国人とは異なっていて、中には日本軍の特務になったり、民衆を虐げたりした者もいる、だから台湾人は大陸で自由に住むことは許されない、ということだったのである。このような状況に直面して多くの台湾人ができるだけ早く故郷へ帰りたいと願ったのは自然なことだった。台湾省旅平同郷

会はこうした台湾人たちの帰還を助ける働きをした。以下に引用する鍾理和の「祖国帰来」という文章は、当時の台湾人社会の混乱状況について生々しく詳細に伝えている。そして大陸政府から受けた仕打ちに対する強い失望を表明している。

対日戦争が終結するとこんどは内戦が勃発し、その戦火が及ぶと交通はいたるところで遮断された。これによって大陸にいた台湾人の帰郷は困難となり、特に華北でそれは顕著であった。華北は台湾から遠く離れており、その間には洋々たる海がある。さらに戦争によって国内の航路は激減し、台湾直通の船はすでになく、上海をぐるっと経由せざるを得ない状況にあった。同郷会は台湾同胞を台湾へ帰すことについて昨年以来、国民政府軍事委員会委員長北平行営、連合国救済復興機関、行政院、輪船公司招商局、台湾行政長官公署の間を絶え間なく駆け回り、交渉し、援助を呼びかけ、懇願し、電報を打ってきた。〔略〕華北に隔離された台湾人が、時局の困難と生活苦のために、不安を覚え緊張し、じりじりと焦り憂慮する有様は、あたかも熱した鍋の中に投げ込まれた蟻のようである。2月中旬、〔略〕突然、人々を喜ばせ興奮させるニュースが届いた。それによれば、華北に疏安を運んでくる海蘇号という船が25日に直接基隆に出航する、この船には三百人を乗船させ帰すことができ、その三百人の内訳は軍属が百二十人を占め、残りの百八十人を天津と北平で半々に分ける、というものであった。〔略〕時間はいくばくもなく、踏むべき手続きはいかにも多く面倒なのであった。〔略〕22日の午前中、台湾へ帰る人員が決定された。その日、三安医院（同郷会）の窮屈な待合室と渡り廊下は、希望と失望、興奮と焦りによって追い詰められた人々で溢れかえっていた。彼らは一人残らず千載一遇の幸運を掴み取りたいと切望していた。しかし、千人を超える人々の中から九十人を選び出さなければならず、選に外れるものは当たるものよりもはるかに多いのである。であれば、たとえ選ばれたにせよ、いったいいかなる冷酷な感情でその嬉しさをあらわすことができようか。選に漏れた二人の女が部屋の隅で自らの不幸を低い声で泣いている時、彼らもまた思わず同じ心の行方をたどるのである。彼らは悲壮であり厳粛である。そして同時に意気消沈し、深い溜め息をつく。しかしながら、たとえどうあっても、選ばれた彼らは帰ろうと決意するのだ。彼らはたとえ同郷の親類どうしであったとしても、同じ運命を歩み同じ環境で育ってきたものどうしであったとしても、人間にとって最も厳しく動かしがたい、そして最も悲しみに満ちた一幕を演じるのだ。それは生と死の別れであり、全くこれよりむごいものはないと悟るのである。⁵²⁾

この記述からわかるように鍾理和は台湾省旅平同郷会の運営にかかわっており、同会が出していた雑誌『新台湾』に「白薯的悲哀」⁵³⁾という文章を発表して自身の台湾人意識について述べている。そこでは「祖国中国」から差別され容れられず故郷へ帰ってゆく台湾人という存在を自らのものとして忍受していく経緯が語られた。

結

先行研究の記述を手がかりに鍾理和の事跡について整理してきた。近年になって明らかにされたことを付け加えながら事跡調査を詰めてゆくと、この作家が中国語圏文学史の流れの中で独自の新

しい可能性を秘めていることが感じられる。

中国大陸における鍾理和の事跡から浮かび上がってきたもの、それは、彼が植民地支配下の台湾人であったからこそ逃れることができなかつた日本と日本語の桎梏から、中国大陸という「原郷」で「中国語作家」として、もがき出ようとする苦難の過程であった。鍾理和は日本の敗戦によって帰った戦後の台湾でようやくそれを実現し得たのではないか。そうしてはじめて、理和は大陸で培った「中国語作家」の目で故郷を見、そこに生きる台湾人としての意識を彼自身の選んだ言語で描くことができたのであろう。

注

- 1) 鍾理和(野間信幸訳)『台湾郷土文学選集Ⅲ たばこ小屋・故郷 鍾理和中短篇集』研文出版、2014。
- 2) 陳芳明(下村作次郎・野間信幸・三木直大・垂水千恵・池上貞子訳)『台湾新文学史 上巻』(東方書店、2015) 317頁(引用は下村作次郎の訳に拠った)。原著は『台湾新文学史』聯経出版、2011。
- 3) 山口守「第6章 吳濁流と郷土文学」山口守編『講座 台湾文学』(国書刊行会、2003) 175頁。
- 4) 鍾理和「鍾理和自我紹介」(1959.10.23『新版全集8』277-8頁)。原文は「我在學校讀的是日文，學校畢業後緊接著的一段時間接觸的又幾乎是日文，這是一；其次，我的中文(應該說是白話文)又是無師自通，用客家音來拼讀的，便是這二點是我後來的寫作嚐受到許多無謂的苦惱，並是寫出來的文字生硬和混亂。我初習寫作時一邊執筆在手，以便在心中用日文打好底稿，在把這底稿譯成國文，然後方始用筆寫到稿紙上。日文文法和客家音的國文，這是我的兩大對頭。現在，前者的影響漸漸淡薄，至於後者一用客家音讀和寫，則至今不改，雖然我已經學會了國語。如果我能用國音讀和寫，則寫出來的東西像不像「話」，作為白話文它通不通順，但憑聽覺我便會很快覺察到，並馬上加予糾正。／我以為這是在像我所處的環境之下學習寫作的人所無法避免的困難，在這點來說，光復後學習寫作的人是幸福的，雖然如此，我仍得承認自己的不爭氣，因為假使自己爭氣些，則我應該早就擺脫此種桎梏了。」
- 5) 若林正文「1 台湾の近現代と二つの「国語」」村田雄二郎、C・ラマル編『漢字圏の近代 ことばと国家』(東京大学出版会、2005) 24頁。
- 6) 同前、24頁。
- 7) 鍾理和の事跡については主に以下の資料に拠った。鍾理和「鍾理和自我紹介」『新版鍾理和全集8』(春暉出版社、2009)、林俊宏「鍾理和先生年譜」『文藝台湾』(第68期、1980.8)、鍾鉄民編「鍾理和生平与著作刊登年表」『鍾理和全集6』(高雄県立文化中心、1997)、張泉「鍾理和:記録下身份認同困境与困惑」『抗戰時期的華北文学』(貴州教育出版社、2005)、江湖『乡之灵魂 钟理和的人生与文学之路』(台湾作家研究丛书第五卷、作家出版社、2006)、鍾怡彦主編「鍾理和生平大事年表」『新版鍾理和全集8』(春暉出版社、2009)、應鳳凰主編「文学年表」『台湾現当代作家研究資料彙編11 鍾理和』(台湾文学館、2011)、應鳳凰主編「小伝」(同前)、野間信幸「解説」『台湾郷土文学選集Ⅲ たばこ小屋・故郷 鍾理和中短篇集』(研文出版、2014)。
- 8) 鍾和鳴が処刑される際に獄友が「幌馬車の歌」をうたって見送ったというエピソードは候孝賢の『悲情城市』(1989)に引用されている。鍾和鳴に関しては藍博洲『幌馬車之歌』(1988・2004)時報文化出版、2016(初版は1991年。後に増補改訂版2004年。初出は『人間』第35・36期〔1988.9・10〕。なお訳書として、間ふさ子・塩森由岐子・妹尾加代訳『幌馬車の歌』〔草風館、2006〕がある)に詳しい。
- 9) 中国の古い社会、特に客家の社会においてタブーとされた同姓結婚を貫くために、満洲へ駆け落ちをした。その顛末については、鍾理和「同姓之婚」(1956)『新版鍾理和全集1』(春暉出版社、2009、以下『新版全集』とのみ記す。85-102頁)に詳しい。
- 10) 鍾理和における「原郷人」ということばの意味合いは複雑である。澤井律之「台湾の作家、鍾理和における民族意識について」(『未名』7、中文研究会、1988.12、253頁)は、「原郷人」というのは、客家のことばで、台湾に住みついた中国人が、大陸に住むあるいは大陸から来た中国人を指している」と解釈している。また、許素蘭「冷眼與熱腸 從『夾竹桃』『故郷』之比較看鍾理和的原郷情與台灣愛」(『鍾理和逝世32週年紀念學術研討會論文集』高雄縣政府、1992〔未見〕。應鳳凰編著『鍾理和論述1960-2000』春暉出版社、2004に収められたものを参照した)は、「原郷」に中原を源とする客家のルーツを読み取って

る。鍾理和は小説「原郷人」（1959、『新版全集 8』31-47頁）で、原郷人を、幼い日に見た大陸から台湾に移動してきた漂泊の民をその原像とし、それが成長の過程で自らの客家のルーツに転化し、やがて和鳴の日本統治への反発やそれと一体になった大陸中国への強い憧れと相まって、中国人としての民族的な自覚に結びついてゆく過程を描いている。

- 11) 鍾理和「致廖清秀」（1957.10.30、『新版全集 7』135-136頁）丸括弧の中は、後にこの書信の一部を基に補筆したと思しき「鍾理和自我紹介」（1959.10.23）『新版全集 8』の記述を補った。原文は以下の通り。「小高時我有三個契友，其中一個是我異母兄弟，一個表兄——如今，俱不在人世了。（我們都有良好的理想。）四個人中，三個人順利地升學了，一個名落孫山；這個人便是我。這給我刺激相當大，它深深地刺傷我的心。（我私下抱起決定有別種途徑趕上他們、趕過他們的野心。這是最初的動機，但尚未定型。）／小高畢業後，入了一年半村塾攻讀古文——中文。這對我以後的事業影響並不大。我後來的文藝工作，主要還是由我閱讀課外的散書建立起來的。小高時，藉著有父親得到的一點點閱讀力，我瀏覽中文古體小說。說得起是我的第一部教科書，是線裝的通俗『楊文廣平蠻十八洞』。入村塾後，閱讀能力增高，隨著閱讀範圍也增廣。舉凡當時能夠搜羅到手的舊小說，莫不廣加涉獵。後來更由高雄嘉義等地購讀新體小說。當時，隔岸的大陸上正是五四之後，新文學風起雲湧，（北新版的）像魯迅、巴金、茅盾、郁達夫等人的選集，在台灣也可以買到。這些作品幾乎令我廢寢忘食。在熱愛之餘，偶爾也拿起筆來亂畫。不過當時未曾打算做作家，只是藉此玩玩罷了（滿足模仿的本能而已）。／有一次，我把一篇作品——還是散文——那給當時在高雄中學讀書的我那位兄弟看。他默默的看過後，忽然對我說：也許我可以寫小說。我不知道這句話是出於無心，或別有所感。此後他便由外處——在高等學校是由台北，入大學時則由日本——源源寄來日譯本世界文學和有關文藝理論的著書給我。他的話不一定打動我的心，但是他的這種做法，卻是我繼續不斷地和文藝發生關係。我今日之從事文藝工作，他的鼓勵是有很大的關係。」
- 12) 本稿に引用したもの他、「鍾理和記念館を訪れて」（『中国研究月報』436、1984.6）、「鍾理和の「中国体験」について」（『臺灣文學研究會會報』8・9合併号、1984）、「台湾の作家、鍾理和における民族意識について」（『未名』7、中文研究会、1988.12）、「台湾の戦後初期における鍾理和 二・二八事件、白色テロの中で」（『未名』13、中文研究会、1995.3）、「ふたつの『故郷』鍾理和における魯迅の影響について」（中島利郎編『台湾新文学と魯迅』東方書店、1997）、「『鍾理和日記』を読む」（台湾文学論集刊行委員会編『台湾文学研究の現在 塚本照和先生古稀記念』緑蔭書房、1999）を参照した。
- 13) 下村作次郎、藤井省三、中島利郎、黄英哲編『よみがえる台湾文学 日本統治期の作家と作品』東方書店、1995、451-468頁。
- 14) 同前、466頁。
- 15) 同前、467頁。
- 16) 許雪姬（杉本史子訳）「日本統治期における台湾人の中国での活動 満洲国と汪精衛政権にいた人々を例として」『中国 21』36、2012.3、113頁。
- 17) 許雪姬（岡田英樹訳）「台湾人の『満洲』体験 1905-1945」『植民地文化研究』1、2002.6、175頁。
- 18) 同前、175頁。
- 19) 同注16、100頁。
- 20) 同前、100頁。
- 21) 鍾理和「柳蔭」『聯合報』副刊、1959未見。（『新版全集 1』217-238頁）
- 22) 菊池正憲「試験は語る 発掘！自動車免許試験（中）昭和・戦前戦中編」『週刊朝日』119（24）、2014.6.13、121頁。
- 23) 尾崎正久『日本自動車史』（自研社、1942）10頁。また、この段落の記述のために以下の文献も参照した。大場四千男「満洲事変期の陸軍省戦備局と自動車政策」（『北海学園大学学園論集』100、1999.6）、塩地茂夫・西山啓「特集対談 我が国における自動車教習所の歩み、そして、これからの自動車教習所のあり方」（『交通安全教育』42〔1〕、日本交通安全普及協会、2007.1）、十河孝雄「アジア・太平洋戦争期における満洲と自動車工業 満洲自動車製造株式会社を中心に」（『一橋経済学』2-1、2007.7）、比留間豊「日本の高速道路の歴史 満洲の高速道路」（『高速道路と自動車』11〔3〕、1968.3）
- 24) 高媛「「楽土」を走る観光バス 一九三〇年代の「満洲」都市と帝国のドラマトゥルギー」小森陽一編『岩波講座 近代日本の文化史 6』（岩波書店、2002）226頁。

- 25) 奉天交通株式会社に関しては、柴田善雅「第Ⅱ部第1章 交通」鈴木邦夫編『満洲企業史研究』（日本経済評論社、2007）、東亜旅行社満洲部編『満支旅行年鑑（昭和17年）』（東亜旅行社満洲支部、1941、375頁、国立国会図書館デジタルコレクションによるインターネット公開 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1916733> 最終確認日 2019.3.22）、満洲国通信社編『満洲国現勢（康德5年版）』（満洲国通信社、1938、262-3頁、国立国会図書館デジタルコレクションによるインターネット公開 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1208089> 最終確認日 2019.3.22）を参照した。
- 26) この頃にはすでに標準中国語音に習熟していたのであろうと思われる。
- 27) 1942年10月16日、21日、27日、29日。（『新版全集6』1-6頁）
- 28) 北京市台湾同胞联谊会編著『台湾会馆与同乡会』北京大学出版社、2012、212頁。原文は「这是“南满洲铁道株式会社”下属的一个分支机构，待遇颇丰」。
- 29) 小林英夫『満鉄調査部』講談社学術文庫、2015（原著は平凡社、2005）、7頁。
- 30) 満鉄調査部に関する記述は主として、小林英夫『満鉄調査部の軌跡1907-1945』（藤原書店、2006）、解学詩『隔世遺思 評満鉄調査部』（人民出版社、2003）、松村高夫・柳沢遊・江田憲治編『満鉄の調査と研究 その「神話」と実像』（青木書店、2008）に拠っている。
- 31) 解学詩『隔世遺思 評満鉄調査部』（人民出版社、2003）507頁。
- 32) 松村高夫・柳沢遊・江田憲治編『満鉄の調査と研究 その「神話」と実像』（青木書店、2008）512頁。
- 33) 山室信一「植民帝国・日本の構成と満洲国 統治様式の遷移と統治人材の周流」ピーター・ドウス、小林英夫編『帝国という幻想「大東亜共栄圏」の思想と現実』（青木書店、1998）183頁。
- 34) 同前、183頁。なお引用文中にある引用部は、中央研究院近代史研究所「口述歴史」編輯委員會編『日據時期台湾人赴大陸經驗』口述歴史、第5期（中央研究院近代史研究所、1994）132頁。
- 35) 鍾理和「祖國歸來」（執筆時期不詳・未刊行『新版全集5』269頁）。原文は「歴史的錯誤的畸形社會」。
- 36) 同前、269-270頁。原文は「祖國抗戰勝利，偽政權解體，前此台灣人賴於立足的社會背景——可以說是歴史的錯誤的畸形社會即告崩毀，於是台灣人便被狠狠的摔入於失業圈裡，吃飯乃成了焦心的問題。以特殊技能，特殊技能已成無用長物，以中國人的身份，則在接收即等於停辦的政治現象下，失業者塞遍街頭，且正與日俱增，原無臺灣人插足之地。留給他們的一條路，就是回家。失業，是促成他們生起回台之念的動機。」
- 37) 鍾理和について言えば、彼の母語は中国語（漢語）客家方言であり、植民地教育によって日本語を習得している。記述言語に関しては、日本語と公学校卒業後に塾（書房）で学んだ文言文、また独学で現代中国白話文を身につけている。後に大陸に渡ってから標準中国語音にもほぼ習熟したと思しい。
- 38) 同注33、185頁。
- 39) 同前、185頁。
- 40) 彭瑞金「序」『台湾作家全集 鍾理和集』（前衛出版、1991）。『夾竹桃』に収められた四篇は『新版全集』の第一冊および第三冊を参照した。
- 41) 鍾理和「民国四十八年九月廿二日与林海音信」『新版全集7』175-6頁。
- 42) 張澤賢「馬德増書店」『民国出版標記大觀統集（精装本）』（上海世紀出版股份有限公司遠東出版社、2012）297-8頁。
- 43) この段落の内容については、張泉『抗戰时期的华北文学』（貴州教育出版社、2005年）97頁、同『沦陷时期北京文学八年』（北京和平出版、1994）、同「也说“南玲北梅”兼谈如何看待“口述历史”」（『中文自学指导』191、2007年第1期）25頁に拠った。
- 44) 馬勇信発行、江流編校、新民印書館出版、馬德増書店発行、1944年7月初版。（注42に掲げた張澤賢「馬德増書店」『民国出版標記大觀統集（精装本）』297頁に拠った）
- 45) 鍾理和は1945年9月13日の日記に、藍明谷（後出）と共に西城の謝人堡を訪ったことを記している。（『新版全集6』9頁）
- 46) 民国34年7月8日於北平（原載は不詳。鍾理和著、張良沢編『鍾理和殘集』（遠行出版社、1976）159-60頁を参照した）
- 47) 同注45。
- 48) 藍明谷に関する記述は、陳漱渝「藍明谷与鲁迅的《故乡》」（『鲁迅研究月刊』1998年第1期、1998.1）53頁、許雪姬（訪談）「藍健東・藍芸若兄妹訪問記錄」（『獄外之囚 白色恐怖受難者女性家屬訪問記錄（下）』

國家人權博物館籌備處・中央研究院台灣史研究所、2015) 117 頁に拠った。

- 49) 台湾省旅平同郷会に関する記述は、北京市台湾同胞联谊会編著『台湾会馆与同乡会』(北京大学出版社、2012) 142-161 頁、また吉路「北京台湾会馆の前世今生(下)」『北京档案』2010 年第 7 期、52 頁に拠った。
- 50) 同注 16、105-6 頁。
- 51) 「關於朝鮮人和台湾人産業处理辦法」が 1946 年 1 月 14 日に公布された。(北京市台湾同胞联谊会編著『台湾会馆与同乡会』北京大学出版社、2012、149 頁)
- 52) 同注 35、277-279 頁。原文は「抗戰終結，隨之內戰蓬起，烽火所及，交通悉遭破壞。這阻塞了海外台胞的回台，而尤以華北者為甚。華北遙隔台灣，海洋重叠，又以戰爭，国内船隻激滅，既無直航駛台的船隻，勢非環繞上海不可。同郷會以台胞回台事，由去年起，即在行營、救濟總署、行政院、招商局、與台灣行政長官公署之間，不斷的奔走、交涉、呼籲、叩頭、發電。〔…略…〕被隔絕於華北的台胞，以時局及生活艱難之故，既不安，又緊張，其焦急與煩憂之狀，有如熱鍋裡的螞蟻。二月中旬，北平同郷會為期連絡便利並且周到起見，開始著手「鄰保」組織。也就在此時，呼地傳來一個叫人高興、也叫人興奮的消息。說，來華北載肥田紛的海蘇號將於廿五日啟航直行基隆，同船可以帶回三百人，此三百人的分配方法，軍屬佔一百二十人，所剩一百八十人分有天津北平二地各得其半。這是天津同郷會傳來的消息，係在二月廿一日晚上的事情。〔…略…〕如此，時間無幾，而有需辦理的事情，又是如是之多、與煩雜。〔…略…〕在半月之內，而且如是不利條件之下，能否公平並且合理地得到預期目的，自屬疑問。然而在這時候，誰都知道，縱使同郷會辦事未至公平與合理，也絕非同郷會的錯，並且他們是絕不會抱怨同郷會的。／廿二日上午，回台人員是決定了，當日三安醫院(同郷會)窄窄的候診室與簷廊，塞滿了為希望與失望，興奮與焦慮所煎迫的人們。他們都在希冀能抓住此千載難逢的幸運。但，在多以千計的人們當中，只要挑出九十個人，當然落選者是要比中選者多得多的。如此，即使中選者，又那裡來冷酷的心情，表示他們的高興呢？當二個落選的婦人，在室隅為自己的不幸低聲悲泣時，他們都不覺得經驗到同樣的心理過程。他們悲壯、嚴肅，並且消沈、嘆息。然而無論如何，他們被選者是決定要回去的。於是他們鄉親之間，同運命，同環境的兄弟之間，便現出人類最莊穆、而且悲哀的一幕。即生死之別，諒亦無過於此。」
- 53) 『新台湾』第 2 期(1946.1) 未見。『新版全集 5』13-23 頁を参照した。

(大阪大学大学院言語文化研究科准教授)